

第26号 華山会報

平成23年4月11日
財団法人華山会

関東南画という言葉

板橋区立美術館館長 安村敏信



明治に入って西洋から美術史学というものが流入したお蔭で、江戸以前の造形物が西洋流の分類に無理矢理押し込められ、正しい姿が歪められてきた。このことは、美術史学のみならず哲学その他の人文系の学問でも同様のことが起こったらしい。

近年になって、ようやくその弊害に気づき日本のものを西洋流に全て押し込めず、西洋流に当てはまらないものは日本の特性として理解してゆく、という姿勢が取られつつある。

美術史学においては、江戸以前の流れを概観するために、作家をいくつかの流派に分けて縦割りで理解する必要が生じた。そこで、江戸末期に、狩野家や土佐家といった血脈によって繋がってきた流派を狩野派・土佐派とし、それに習って、師承関係で繋がってきたものも、円山派・四條派などとした。その中のひとつに南画派がある。

南画は言うまでもなく、十八世紀に新しく中国から流入した南宗画様式を取り入れようとした祇園南海・服部南郭・柳沢淇園・彭城百川といった人々によって始まり、池大雅・与謝蕪村によって関西で大成されたものだ。それが十八世紀末から次第に江戸にも移入され、谷文晁によって江戸流に大成された。この文晁を中心に南画は群馬、長野、仙台と関東・東北地方へ広く伝播した。

これらの人々を総称する言葉として、戦後に関東南画という言葉が考え出された。渡辺華山は、関東南画の主要画人として文晁と併称される。

しかし、私の目から見ると、華山の重要な仕事は、本来の肖像画の確立と、「四州真景図」によって達成された軽妙な風景画の開拓である。このいずれもが南画の目ざすものとは全く正反対にあるものといつてよい。南画はあくまで心象風景を描くものであるからだ。

このように、江戸以前の画家を、何が何でもある流派に押し込めようとする、異和感が出てくる。幕末の『古画備考』では、文晁や華山は、何家に属するでもない、「名画」を描く画家として数え挙げられているのだ。

こうした近年の美術史学の流派づくりの弊害のひとつとして琳派や江戸琳派というものがある。かつて私は「琳派なんて本当にあつたのか」というエッセイを書いて、この問題を提起したが、その後数人の研究者も同様の視点から問題を探るようになってきた。

とりわけ、関西に生じた文化事象を、文化東漸ということ、そのまま江戸をくつつけて江戸琳派・江戸南画などと呼ぶことはよくない。画家の真実を見失うのである。琳派で言えば、酒井抱一を江戸琳派の画家とすることはよくない。抱一が描いた肉筆浮世絵の画業が江戸琳派の仕事となり、それを弟子の鈴木其一が受け継いだということになる。琳派における浮世絵の継承など、どこかおかしいではないか。

関東南画でも同様なことが言えよう。華山の肖像画を受け継いだ椿椿山を考えてみよう。南画における肖像画の継承ということになる。心象風景を描くことと、リアルな写貌を求めることは正反対のことである。

つまるところ、江戸の画家を、関西の流派に無理矢理当てはめることがいけないのだ。酒井抱一は江戸独自の抱一派を形成したのであり、文晁は意外と文晁派を形成できなかった。その門人の一人として華山は独自の様式を確立し、椿山がそれを継承した。これが真実の姿であり、それでいいのだ。



城宝寺墓前祭

田原の歴史を知ること、
田原を愛すること
田原市教育委員会
委員長 山本明子

江戸時代、田原藩主であった三宅家のお墓が田原町北番場にある靈巖寺の一番奥の広々とした場所にあります。ひっそりとしたたたずまいで殿様の代々の墓として立派で趣きのあるものです。夏になると保存会のみなさんが清掃を行います。数年前より私も参加することになりました。この行事は一年に一回で伸びた草や木を掃除するのは一苦労ですが、墓参りを兼ねて参加させてもらえることは良い機会だと思えます。田原に住んでいながら田原藩のことをほとんど知ることにはなかつた私は、三宅家代々のお墓を参りながら幕末の激動の時期に田原藩三宅の殿様はどのようなことを考えていたのだろうと思うようになりました。

田原藩といえば、昨年のNHK大河ドラマ「龍馬伝」を見ていたとき勝海舟が龍馬に「海軍操練所の協力を求めるならまず田原藩へ」と言った場面があり、びっくりして見ていました。そのころ渡辺華山はすでに

亡くなっており、藩主の三宅康保が華山の門弟村上範致（のりむね）らに西洋型の帆船順応丸を作らせ、また軍備も充実させていたため藩は目を見張ったそうです。順応丸の模型が田原市博物館のロビー中央にあります。この順応丸の建造に際し、漂流してアメリカに渡って、二年前に帰ってきた田原の漁師作蔵（若見村）や勇次郎（芦村）を雇い入れたそうです。華山の亡くなったあとにその精神は受け継がれ、一万二千石の小さな田原藩が他諸藩に対してリーダー的存在になっていたという事実は、田原の歴史を少し勉強した人ならとつくに知っていたことでしょう。お恥ずかしいことですが、私はこのことを知ってから田原の歴史をもっと知りたいと思うようになりました。

最近のことになりますが、私は三十数年前に田原に嫁いできました。当時は田原市博物館の場所には華園保育園がありました。廃園になったことも覚えています。その後、町はどんどん変わりいろいろな建物や施設などが増えました。イオン、サンテパーク、華山会館、博物館、また三河港大橋や赤石地区も出来ました。挙げるときりがありません。

何か施設ができると家族で行き、楽しみました。施設の充実とともに道路わきにいろいろな花も植えられ街の景観は田原を訪れる人に良い印象をもたらしています。

このまち田原は幕末からの精神として、海外に目をむけること、自分の町を愛することが受け継がれて自然と受け入れられているように思われます。歴史から何かを学ぶことはこういうことなのでしょう。田原に住んでいて、この町に誇りを持ち、田原をますます愛するひとりになることができたいと思います。



三宅家墓所（霊巖寺）

目次

題字「華山会報」元華山会理事
故小澤耕一氏

P ① 関東南画という言葉

安村敏信

P ② 田原の歴史を知ること、
田原を愛すること

目次

P ③ 画家渡辺華山の心象

『千山万水図』

P ④ 渡辺華山『毛武遊記』③

P ⑧ 博物館収蔵品から

渡辺華山筆

『客坐掌記（天保九年）』④

P ⑫ 華山・史学研究会研修視察

P ⑭ 華山の田原行（十）

P ⑯ 財団法人華山会 からご案内

P ⑰ 田原市博物館

画家渡辺崋山の心象

重要文化財 千山万水図

天保十二年（一八四一）

絹本着色

縦一四七・〇cm 横七一・〇cm

個人蔵

長く鎖国を続けた江戸時代の日本では、中国の文人の生き方に憧れ、その発露として作画活動を行った文人画家たちが登場する。見ることがかなわない中国の風景への憧れは、文人画家たちが互いに影響を及ぼし、自らの作画に活かしている。渡辺崋山の作品は、写実を重視し、花鳥画が最も多く見受けられるが、中国に題材を持つ故事人物画も多く見られる。ただし、旅のスケッチを除けば、実際の



風景を描いているものは、驚くほど少ない。晩年の田原塾居中には、江戸にいる画弟子の椿椿山と多くの質疑応答を手紙で往復したが、その中で、椿山の質問「山水空疎」に対し、以下のように答えている。「山水空疎、顧炎武、日知録図画ノ部ニ「山水ノ画興り、古意亡矣」ト云條ニ、

也。山水モ古ハ其通りニテ、「五岳四瀆図」「黃河流勢図」「山川地形図」「江湖九州山岳勢図」也。人物ハ何人、花鳥、何花何鳥ト指シ可申ヲ画ト云フ何レノ所ノ山水カ、唯雲霞、煙靄、四時ノ氣を画クノミ、山水トハ申カタク聖人ハ事ヲ創、賢者ハ述、人アリ土地アリテ禮政興ル皆物アリ、則アリノ意。今ノ山水ハ老莊異端ノ如、画ノ真面目ニ害アリ、山水ハ空疎ノ極也。」と答えている。図上に「千山萬水図 丁酉六月朔五日 迎快風寫之子安」と書し、

「摹古」の印を捺し、他の山水画の摸写と考えられるが、崋山のイメージの中にある風景を透視遠近法的に鳥瞰的に表現している。山の緑と平地の褐色、海の青が織り成すコントラストは、田原へ来て、半年余、奉行所での取調べ後の体調が戻ったためか、明るい色調は見る者に雄大さを感じさせる。近景には高さのある瀑布、その流れの先には集落と人々が描かれる。さらに中景・遠景にも複雑な海岸線の間に多くの集落が描かれ、構図から三浦半島とする説もある。また、「千山万水」という言葉も、天保三年刊行の『画本唐詩選』「宋之問・吟第二図」とその塾居中の心境も含めた関連性も指摘され、天保八年のアメリカ商船が追い返されるモリソン号事件から一部の船は外国船として描いたと考えられている。鎖国日本の行く末を予感させる。「丁酉」は天保八年であるが、年記を遡及した田原塾居中の作品と考えられる。

田原市博物館学芸員 鈴木利昌

渡辺華山『毛武遊記』③

研究会員 加藤克己

我僕足やミて一歩だにす、ミえず。いかゞせんと持せし行李と笈とを、梧庵と、も互に荷ひにして行ほどに、まことに肩のわたりくひいるばかりにいととなりて、又一歩だにす、まず。かくせしほどに雨はふり、更たけて行先も見わけがたうなりにたり。辛うじて桶川といえるに着たり、夜戌の時過程なりし。

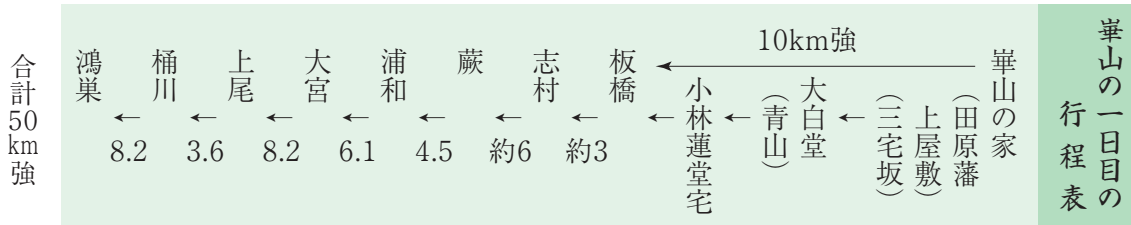
従僕（の弥助）が足を痛めて一歩も進むことができない。どうしたらいいものかと、持たせていた行李と笈とを（自分と）梧庵と二人で互いに荷って行くと、本当に肩のあたりが激しく食い入るかと思えるほど痛くなって、また一歩さえも進むことができない。このようにしているうちに、雨は降り出し、夜が更けて行く先も見分けがたくなってしまった。やつのことで桶川（武蔵国足立郡、中山道宿駅、桶川市）という所にたどり着いた。夜八時を過ぎた頃であった。

※ 我僕……す、ミえず 後に記すように、旅程が通常よりもかなりきついためであった。

※ 梧庵 高木梧庵（一八〇八―一六二〇）。名は晋吉、号は梧庵、華山の門人。天保五年（一八三四）頃、江戸を離れて京都の季鷹流狂歌の宗匠山本家へ養子に入った。京都では、賀茂季雄と名乗

桶川

り、賀茂社の雑掌或いは執事という職に就いた。



華山の家から板橋までの道筋はよくわからないが、距離は10kmをかなり上回るだろう。板橋―蕨間は旧中山道を地図で測定、蕨―鴻巣間はJ R高崎線の駅間距離。 単位km。

うまやぢなり。一僕を賃して五十一文か行李を持せ出立つ。夜愈ふかし。人のいき、もなく雨またしきりにふり出す。人の家かりて糞と笠となり、なかなか旅人のけしきなれど、つかれてくるしさ言わんかたなし。漸に鴻の巢殻屋次郎兵衛かたに宿かる。吉兵衛先到、予到りし、驚き出向ふ。酒を命ず。肴あしくたまご五ツ買ひて食ふ。

桶川（三人旅行図）

宿駅である。一人の従僕を雇って（五十一文か）、行李を持たせて出で立った。夜はいよいよ深く激しく降り出した。人の家を借りて、糞と笠を着け、ずいぶん旅人らしい姿になったけれど、疲れて苦しさは言葉に言いようがない。やつこのことで鴻巢（武蔵国足立郡、中山道宿駅、鴻巢市）の殻屋次郎兵衛の家に宿を借りた。吉兵衛が、先に到着しており、自分が到着すると、驚いて出迎えた。酒を出すよう命じた。肴は悪く卵を五つ買って食べた。

※ 華山の家から板橋までの道筋ははつきりしないが、青山を経由しており、この日一日の歩行距離は五十キロメートルを超えたと思われる。普通は一日に四十キロメートルといわれるので、当時の人としてもかなり厳しい旅程である。華山は旅を急いでいた。それでも、その間にメモをとったり、スケッチをしたりしていたのである。

此家はいとゆたかなる逆旅にて、商人多かる宿なりとぞ。おくの方に大やかなる蔵ありて、此蔵の中を三つにしきり、旅人にかすなり。予又その中に寝たり。凡此家旅人に借すざしき、十五六間もあるべし。一間一間に一二三といふ札をかけ、はきもの、杖などハ、又出口のかたにしるし置、其十何番之旅人といふにて、しるし定るなりとぞ。予がやどりし時も、凡式十人もありぬらんかし。

この家はたいへん豊かな旅宿であって、商人が多く利用する宿であるという。奥の方にたいへん大きな蔵があつて、この蔵の中を三つにしきって、旅人に貸すのである。自分もまたその中に寝た。およそこの家は、旅人に貸す座敷が、十五六部屋もあるであろう。一間（ひとま）一間に一、二、三という札をかけて、履き物、杖などは、また出口の方に記しをつけて置いておく。その十何番の旅人というによつて印が定まっているという。私が宿泊した時も、およそ二十人も宿泊していたであろう。

あしたのかごを命ず。これハ吉兵衛がす、むるをもて、やむを得ずかくハせしなり。桐生と方ハ人の奢し地なれば、加籠にて其宿に入らざれば、外き、あし、と聞し。
鴻の巢より桐生まで壹分式朱四百文、桐生にいたりて四百文、宿賃といふをいだすなり。から尻馬壹疋鴻の巢より熊ヶ谷まで（空白）
梧庵を乗す。

明日の駕籠を命じた。これは吉兵衛が勧めるのでやむを得ずこのようにしたのである。（行き先である）桐生（上野国山田郡桐生新町、群馬県桐生市本町）という所は、人が贅沢になつてゐるので、駕籠に乗つてその宿に入らなければ、世間体が悪いと聞いた。

鴻巢から桐生まで二分二朱四百文、桐生に至つて四百文、宿賃というものを出すのである。荷なしの馬一疋、鴻巢から熊谷（武蔵国大里郡熊谷、中山道宿駅、熊谷市）まで（空白）梧庵を乗せる。

夜雨いたくふる。

夜、雨が激しく降った。

十二日

寅刻過頃起出で、燈火に食す。旅のよそほひ出来て籠に乗る。夜しらミたり桐生二到にハ、熊谷にて夜あくる位ならでハおそしとぞ。吉兵衛は先だちに立。梧庵ハ馬にのりておくれたち、僕が加籠につきて来。風なけれど此日寒し。きりふかくおりて紅葉とところどころに見ゆる。茅店断続、籠を送る。

十二日

午前四時過ぎ頃起きだして、ともし火の下で食べる。旅の装いができて駕籠に乗る。夜が明け始めてきた（今日のうちに桐生に到るためには熊谷において夜が明けるくらいでないといけない）。吉兵衛は先触れに立ち、梧庵は馬に乗って遅れて

立ち、私の駕籠について来る。風はないけれど、この日は寒い。霧が深く降りて紅葉がところどころに見える。茅葺き屋根の茶屋が切れたり続いたりして、駕籠を見送っている。

駕籠かくおのこ云。上毛の国新田といえるは、これよりちかきにあり。それに新田万次郎どのとて、左中将義貞どの、御末裔にておはします。が、御家のこなども多く侍るハ、故よしある人も侍り、又こがね奉りて官を買ひ、ほこりかによをわたるもあり。そが中に馬の売買をせる人ありて、これを所のものはく楽とよびなし、秋の中ばにいたれば、おくの仙台へいゆきて、馬買ひ、新田どの御用といふ札立てゆきかひするなり。

駕籠かきの男が言う。上毛の国新田（上野国新田郡、群馬県太田市）という所は、ここから近い所にある。そこに新田万次郎殿といつて、左中将（新田）義貞殿の御末裔にあらせられるが、御家の子なども多く仕えているのは、昔のいわれのある人も仕え、またお金を少し献上して官職を買ひ、誇らかに世を渡る者もある。そんな中に馬の売買をする人があつて、これをその地域の人は「伯楽」と呼んでおり、秋の半ばになると、奥州の仙台（陸奥国宮城郡仙台城下、宮城県仙台市）へ行つて馬を買ひ、「新田殿御用」という札を立てて往來するのである。

※ 駕籠かくおのこ云 以下の話の真偽については、怪しいところが多い。

新田万次郎館跡

平成六年二月撮影。当時は群馬県立太田西女子高等学校、現在は群馬県立太田フレックス高等学校（男女共学）。



※ 新田万次郎 旗本岩松万次郎。南北朝時代、足利方の岩松満国が新田義貞の孫を養子とし、岩松家を継がせたという。岩松氏は、金山城に入り、新田荘に君臨したが、家宰の横瀬氏（後に由良氏）に次第に実権を奪われた。江戸時代初めは二十石で世良田に住したが、寛文三年（一六六三）百二十石に増え、新田郡下田島村（太田市下田島）に屋敷を移した。代々岩松万次郎と称し、交替寄合衆。明治に至り、俊純の時に男爵に列せられ、新田氏を称したが、この文面から、江戸時代にも「新田殿」と呼ばれていたようである。その屋敷跡は、群馬県立太田西女子高等学校の時代を経て、群馬県立太田フレックス高等学校（男女共学）となっている。

※ 左中将義貞 新田義貞。？―一三三八。上野国新田荘を本拠とする武将。元弘三年（一三三三）、鎌倉を攻めて北条氏を滅ぼすが、建武政権下で足利尊氏と対立。南北朝内乱の初期、延元三年（一三三八）、越前国藤島（福井市藤島町）において足利方の斯波高経軍と戦って討死した。

※ 馬の売買をせる人 この人物の存在については不明である。

※ はく楽 伯楽。もとは特定個人名。姓は孫、名は陽で、中国春秋時代に秦の穆公に仕えたという。馬を見分ける名人であった。そこから、よく馬の良否を見分ける者、また、馬や牛の病気を直す者を「伯楽」というようになった。博労（ばくろう）ともいう。鎌倉時代

の『吾妻鏡』承久三年六月十八日条には、「馬を飼ふの芸、古の伯楽と謂ひつ可し」（原文、書き下し文の岩波文庫版による）という表現がある。この場合は、伯楽を昔の個人名として使っている。

こは馬買ふ人ひとりにて、一疋も三疋も牽きて帰れば、昼はゆき、の人のさまたげにもなれば、夜のミ旅行せるなり。これハ伯楽のならばしなるを、この人は新田どの、用といえるま、に、ひるもほ、やけに引もてありき。万心のま、なるも、新田どの、御かげなめりと、人もいひ、ミづからも左思ひてありしが、ある時仙台の町通けるとき、百姓体のおのこあとよりよびかけて、扱その引玉ふ馬は新田どの、御用といえる、いづれの御人のことに侍るや。

その訳は、馬を買う人が一人で二疋も三疋も牽いて帰るので、昼は（道を）行き来する人の妨げにもなるから、夜だけ旅行するのである。これは伯楽の習わしであるのだが、この人は「新田殿の用」といえるままに、昼も表立って馬を引いてくるのである。すべて心のままにできるのも、新田殿のおかげであると、人も言い、自らもそのように思っていたのであるが、ある時、仙台の町を通っていた時、百姓姿の男が後ろから呼びかけて、「さてそのお引きになつてゐる馬は、新田殿の御用といわれるが、いづれの御人のことにござりますか」という。

左に候、これハ上毛国山田郡新田と申ハ、むかし左中将どの、おこりし所にて、世々此地除地賜りて、新田万次郎どのとハよび申され候。

（馬買いが）「そのことですが、これは上毛国（群馬県）山田郡（新田郡の誤り）新田という所は、昔、左中将殿（新田義貞）が登場した所であつて、代々この地は租税の免除を賜つていて、新田万次郎殿とお呼びされています」（と答えた。）
 ※ **此地除地賜り** 旗本岩松（新田）万次郎の領地であり、岩松氏が税を取るわけで、農民は税を納めるのだから、「除地」という表現は当てはまらない。近くにある新田郡徳川郷（徳川氏発祥の地として年貢課役免除されていたという）と話が混同しているか。

そのおのこいと驚きける体、左あれバわれ等もミな、よし貞君御家子に（空字）役にうせ玉ひてより世をのがれ、仙台のより北西の山のおくに一村落あり。これも又新田どの、御家のこといえるをもて、世々除地賜り、領主へ年貢もせで、幾年か山の中に住てよをおくり申候。先我かたにきまして御覽候へといふまゝに、行て見侍るに、いと大きやかなる家居いくつもならびて、その内に村長も侍り、医師なども侍りて、皆豪富の人のミなり。

その男はたいへん驚いた様子で、「そのようであるならば、われら（の先祖）も皆義貞公の御家

の子に（空字）戦役で（義貞公が）お亡くなりになつてから（われらの先祖は）世を逃れていました。仙台のより北西の山の奥に一村落があります。これもまた、新田殿の御家の子といえることをもつて、代々租税の免除を賜つて、領主に年貢も出さず、何年か山の中に住んで世を送つてきました。まず私の方にいらつしやつて御覧なさい」というまゝに、ついていってみると、たいへん大きな家屋がいくつも並んでいて、その中には村長もおり、医師などもおつて、皆富豪の人ばかりである。

※ **役** 越前藤島の戦いのことか。延元三年（一三三八）、新田義貞が越前国吉田郡藤島（福井市藤島町）の藤島城を攻撃中、斯波高経方の軍と遭遇して討ち死にした戦い。

※ **一村落あり** どこか不明。
 この伯楽よき功を立んと、かたくその人々とちざりて帰り、この事を万次郎どのへ御す、め申、さてはじめてお目見えとて、ことしの夏凡七人きたり、家のこの約ちざり、当座に小金三十兩を奉りて、かえりけるとぞ。

この伯楽は、よい功を立てようと思ひ、固くその（村の）人々と約束して帰り、このことを万次郎殿にお話し申した。さて初めて（万次郎殿に）お目にかかるということで、今年の夏、およそ七人が来て、家の子の約束をし、さしあたり小金三十兩を献上して帰つていったという。

（続）

田原市博物館収蔵品から

渡辺峯山筆『客坐掌記(天保九年)』④



(図) 達磨

写雪舟太青何帛

方祝

弥御堅固之由、珍重御坐候、御上京被成候由、近日中御出被成候て、御貴面可申、饅頭二十被下候由、忝存候、其内煩貴面御礼可申

三月廿日

遊翁

然円様

堅固 すこやか

珍重 めでたい

遊翁 未詳

然円 未詳

達磨 Dhama 生没年不詳、五二〇年頃インドから広州を経て金陵に至り、洛陽付近で教化にあたり、晩年は少林寺で面壁九年間座禅し、慧可に禅法を授けて、没したという。

雪舟 雪舟等楊(二四二〇—一五〇六?)、室町・戦国時代の画家。応永十七年備中国に生れ出家して京都相国寺に入り、画を周文に学ぶ、四十歳過ぎ大内氏の周防山口に移り雲谷庵を開く、応仁元年明に渡り、二年後に帰国、独自の山水 画を追求し、日本の水墨画を大成した、永正三年に没したと推定される。作品に「秋冬山水図」、「山水長巻」、「破墨山水図」など。(国書人名③ 30)

何帛 立林何帛、寛保年間の人、名玄徳、号鶴岡道民、金牛山人、喜雨斎、白井宗謙と称す、光琳また乾山の門人という、説に乾山が光琳の印方祝を与えたという。(日本書画骨董・507)



(図) 梅花

古瓶朴素無人取、我供梅花度歳寒

秋谷 張

(図) 山水

仿耕烟山人、湖山雪残

九竜山樵 朗軒

秦宝

秋谷 張莘 清、初名昆、字秋谷、

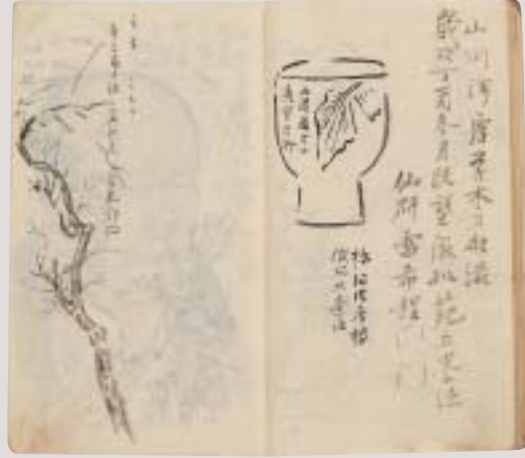
秋穀、仁和(杭州)人、僑寓呉県(江蘇蘇州)、中年渡海遊琉球、日本、乾隆四六年(二七八一)遊長崎、五三年(一七八八)回国、写花卉、専師寿平、書亦類似、墨梅得王冕法。(中・851)

耕烟散人 王翬 (一六三二—一

七二七)、字石谷、号耕烟散人、烏目山人・清暉主人・劍門權客、江蘇常熟人、嗜画、似有夙慧、運筆構思、天機迸露、迥非時流所能、死後画益重、有「画聖」之称。(中・130)

秦宝 清、字朗軒、号漫郎、江蘇無錫人、居呉縣(江蘇省)、工画柳。(中・748)

既望 十六日
北苑 董源(？)九六二、五代南唐、字叔達、鍾陵(江西進賢)人、南唐中主為北苑使、善画山水、樹石幽潤、峯巒清深、得山之氣、天真爛漫、意趣高古、水墨類王維、著色如李思訓。(中・1228)
雷希程 未詳
五清圖 文人画で五つの清いものを画くこと。松・竹・梅・蘭・石、或いは、松・竹・蘭(または菊)・芭蕉・石
柳橋 神田川の河口に架かる橋。東京都台東区柳橋、花街。
撥冗 用事を繰り合わせる、忙しい所を繰り合わせる。



山川渾厚、草木莊滋
 歲次丁酉冬月既望、做北苑五墨法
 仙研雷希程
 (図) 壺(芭蕉の葉)
 五清図之一
 適合於柳
 橋河内屋楼
 撥冗水辺渡

辛未春日訪 吳仲圭 呂元作
 (図) 樹

吳仲圭 吳鎮(3頁右 梅道人參照)
呂元 清、字耕餘、吳興(江蘇蘇州)人、工山水、人物、亦善草虫。(中・268)



(図) 山水図(扇面)
 穹明
 山翠
 近、
 地静
 葉声
 多
 伊孚九
 *
 十寸見藤八 一中ふしをかたる、
 三味せん はんばのおとなと
 いふ 女
 なり

伊孚九 伊海 清、字孚九、号莘野、吳興(浙江湖州)人、善画頗自矜惜、嘗遊日本、為日推重。(中・181)

十寸見 ますみ 河東節を語る一門の姓のようになられた。
一中ふし 京都の都太夫一中によつて元禄の頃創始された浄瑠璃。



*西舍黄
梁夜春
白毫菴瑞図*

翰林学士貫酸齋題

(図 人物)

西舍黄梁夜春

王維「田園樂七首」

王右丞詩集卷十四

(漢詩大観・1561)

汲酒会臨泉水 抱琴好倚長松
南園露葵朝折 東舍黄梁夜春

瑞図 張瑞図(?)(一六四四)、字長公、号二水・白毫菴道著者、福建晋江人、万曆三十五年(一六〇七)探花、書法奇逸、善山水法黄公望。(中・861)

翰林学士 唐の玄宗以来設けられた官名、翰林院で詔勅の文章案の作成を掌った。

貫酸齋 貫雲石(二八六〜三三四)、字酸齋、ウイグル人。本名は小雲石海涯(セヴィンチ・カヤ)。元のダルガチ(地方の行政長官)。仁宗(位 二三三〜二四〇)に疏事六条を献呈し、正統的儒教の統治原理を進言した。漢化したウイグル人の典型として知られる(ペーター・ツイメ著、小田壽典訳「高昌ウイグル王国の宗教と社会」豊橋短期大学研究紀要第10号)、一九九三)。「元史」卷一百四十三に列伝あり。草隸等書稍取古人之所長、变化自成一家、其流於毫端者、怪怪奇奇、若不擬滯於物。(中・947)



(図 サンダル左足)

*Weer kunde
*Weer 或ハ *Weder
(図 サンダル右足)

Weer kunde 蘭語、氣象学
Weer 蘭語、天候、天気
Weder 蘭語、天気、天候

飄零 ひらひら落ちる
楊柳 やなぎ。楊がカワヤナギ、柳はシダレヤナギ。
孟温九 未詳

因果太居士 因果居士 大永五年(一五二五)生、没年未詳(慶長十七年(一六二二)八八歳)で生存、華嚴宗の僧侶、安土宗論の判者の一人。(国書人名① 205)

八宗兼学 ひろく八宗の教養をかね学ぶこと。
 織田信長(一五三三-一五八二)、清州城主、桶狭間で今川義元を討つ、京都本能寺で明智光秀に襲われ自殺。安土にて宗論 天正七年(一五七九)浄土宗浄厳院で行われた浄土宗と日蓮宗の法論、織田信長が日蓮宗を迫害しようとしたものといわれる。宗論の内容は太田牛一著『信長公記』巻十一等に詳細に記されている。
 家康 徳川家康(一五九一-一六五八)、三河岡崎城主、征夷大将軍、江戸幕府初代将軍。
 後奈良帝 第一〇五代天皇、在位二五二六-一五五七年。
 大永五年 一五二五年



梅花闌尽雪
 飄零、楊柳
 青々春水生、
 一夜東風
 吹雁道、江南江
 北故郷歸
 孟温九
 (図) 梅花

南無天満那王天神
 金華山十界因果太居士筆
 正筆
 因果居八宗兼学有髮也、織田信長公ノ時、浄土
 日蓮安土にて宗論アリ、此時法問ノ執事タリ、時二
 家康公ニ調 居士又年、即答日、因果居士今歳ハ
 十八也、○考ルニ後奈良帝ノ時也、大永五年乙酉、生卒未知

かきはん

宣長 本居宣長(一七三〇-一八〇二)、通称健蔵、号春菴。鈴屋(すずのや)、伊勢、松阪の木綿商小津定利の男、国学を研究、賀茂真淵(一六九七-一七六九)に入門、著『玉勝間』、『古事記伝』がある。(国書人名④ 562)

高瀬さす 浅瀬に舟を進める。
瀬田の長はし 瀬田川にかかる橋。(滋賀県大津市)

恭光 戸田茂睡(一六二九-一七〇六)江戸時代の武士歌人。初め渡辺氏、名初め馮のち恭光、通称茂右衛門、のち茂睡、号馮雲寺露寒軒など、駿河府中藩士渡辺忠の男、伯父戸田政次の養子、晩年出家し江戸に住し、文雅の生活を送る、従兄の山名玉山から歌学の伝授を受けたが、伝統歌学に対して独特な批判を展開した、著「梨本集」、「紫の一本」など。(国書人名③ 410)

平林淳信(一六九六-一七五三)、字明義、通称庄五郎、号静斎、桐江散人、消日居、細井広沢の門人。(日本人名⑤ 282)



草枕 たひと思へと 波のとのと、かむはまは いねかてぬかも
 宣長*

湖水眺望
 高瀬さす 袖の朝霧 たへくに
 かせ立わたる 瀬田の長はし 恭光*

茂睡
 松鶴寿 平林淳信*

消日居書
 消日居

(続)

平成二十二年度華山・史学研究会研修視察
立原杏所を訪ねる―水戸の旅

平成二十二年度華山・史学研究会研修視察は、十月三十、三十一日、土日曜日にかけての一泊二日で行われました。今回は、華山の画の友人であり、水戸徳川家の家臣であった立原杏所（一七八六―一八四〇）とその師友を取り上げた特別展を開催中の茨城県立歴史館をメインにしました。

当日、午前八時三十分 豊橋駅に集合した会員は、山田哲夫・別所興一・藤城精一・加藤克己・柴田雅芳・鈴木利昌の六名で、昨年に続き、少人数での出発となりました。豊橋駅を八時四十三分の新幹線ひかり号で出発し、東京から山手線経由で上野へ移動、上野駅発十時三十分の特急フレックスひたちで水戸へ向かいましたが、日本列島を台風十四号が直撃したため、雨が激しく、第一日に屋外を歩くコースは無理と判断し、駅ビルで昼食後、早速、タクシーで史跡・名勝としても有名な常盤公園（偕楽園）を横に見ながらの移動後、主目的の茨城県立歴史館の特別展「立原杏所とその師友」を観覧することにしました。

この日は雨も止みそうもないため、じっくりと特別展を観覧しようと展示会場を順番に進んでい

ると、特別展を担当していた首席研究員の藤和博氏が小グループを相手に展示解説を始めました。実は視察の中では、第二日目の日曜日午前十一時からの展示解説を拝聴しようと考えていたのですが、これはちょうど良いとそのグループに加わり、解説をしてもらいました。そのグループのメンバーを見ると知っている人物が参加していました。学習院大学の大学院生達を中心にしたグループで、近世美術史を研究されている教授で、千葉市美術館長の小林忠氏も入っていました。この特別展では、第一部として「翠軒、十江そして杏所へ」で立原杏所へ影響を与えた父で、水戸徳川家の彰考館総裁立原翠軒と絵の師であり、翠軒の元に入りしていた林十江などの作品を展示していました。第二部では、「謹厳なる文人杏所の世界」、第三部では、「文晁と門下四哲とその交流」と題し、谷文晁・渡辺華山・椿椿山・高久靄厓の作品、さらに最後のコーナーには、杏所の長女春沙・三男朴二郎の作品と盛りだくさんで、前後期合わせるのと、一三五点が展示されていました。田原市博物館からも重要文化財渡辺華山関係資料の内から椿椿山が描いた小集図録、救済活動の記録である趣町一件日録、杏所作品、杏所の娘で渡辺華山に絵を習った春沙の作品などを出品していました。日頃、見る機会の少ない水戸の南画を描いた作家の

全体像を知ることができました。

たつぷりと特別展の出品作品を堪能した後は、県立の博物館ならではの歴史系の総合展示、常設展示室を観覧し、疲れ果てたため、ホテルへチェックインし、次の日に備えることにしました。暗くなってから、折角の機会であるので、また台風の名ごり雨の中、傘をさして、靴を濡らしながら、水戸市内にある食事所（アルコールも）へ向かったのです。



第二日目は、前日までの雨は上がり（昨年の研修視察と同じパターン）、ホテルの目の前に広が

る千波湖（せんばこ）沿いに徒歩で、これも今回の視察の目的の一つ、映画「桜田門外ノ変」ロケセットへ向かいます。大名屋敷の町並みが再現されているとのことで、彦根藩井伊家の隣は田原藩三宅家の上屋敷、井伊家の行列を映す際に、三宅家の建物か、堀くらはいは復元されている可能性もあるのではと、期待を持ち、出かけました。ちなみに、桜田門の隣は半蔵門で、江戸城（現在の皇居）の西の端に当たり、その門前は、田原藩上屋敷に当たり、渡辺華山の生誕地です。華山が使用していた印の中にも「半蔵御門外三宅土佐守内」とあるものも現存しています。井伊家から桜田門へ向かう井伊大老襲撃の道がオープンロケセットの中央になり、「桜田門外ノ変」では、映画の冒頭で紹介され、幕末から明治維新へと向かう契機となった大事件から百五十年経た現代に映画化されたのです。映画の主題は、水戸浪士にスポットを当てたもので、事件に至る経過と、その後の逃亡劇を描いています。ロケセット内には、実物大の桜田門・彦根藩上屋敷井伊邸・安芸広島藩上屋敷浅野邸・杵築藩上屋敷松平邸・米沢藩上屋敷上杉邸などが総工費二億五千万円で建設され、それとは別に江戸城松の廊下の場面が復元され、「桜田門外ノ変」を学習し、映画撮影のエピソードを知ることができる記念展示館もあり、観光客も多

く訪ねていました。このロケセットは今年の三月三十一日まで公開されていました。



水戸藩の藩校である弘道館は、水戸徳川家第九代藩主徳川斉昭（烈公、一八〇〇〜一八六〇）が天保十二年（一八四二）八月に創設したもので、斉昭の屋敷として、映画撮影にも使われています。全体の土地は特別史跡になり、正門、正庁及び至善堂の建物は重要文化財に指定されています。ここでは、観光ボランティアガイドの方に説明してもらいました。観覧者出入口から建物内に入り、回廊になった板の間張りの廊下から、溜、諸

役会所、重臣らが列席して儀式などが行われる三の間・二の間、藩主が列席する正席、さらに中庭を間にしながら、十間畳廊下を経て、溜、四の間・三の間・二の間を経て、至善堂まで回ることができます。



その後、タクシーで水戸駅まで戻り、駅付近で資料あさりとお土産を買い、岐路へと向かいました。

研究会員 鈴木利昌

華山の田原行（十）

二月十五日

華山が田原に到着した翌日の二月一日の項（本会報二十一号）に、「君上御思召出るまゝを仰られて、可否を申あぐべきと御沙汰ある。一は御奏者番御内願之事、二は御妾之事、第二は御即答に申上たれど、第一は思ふ事あればまた申あげんとて止む。」と奏者番の件について記してあります。この「思ふ事」を「申あげ」たのがこの日です。この日登城した華山は、康直から改めて奏者番を望んでいることを聞かされます。

奏者番とは、江戸幕府の職名で、「年始・節句・初目見などに出礼した大名などの姓名や献上品を將軍に言上・披露し、下賜品を伝達した」（岩波『日本史辞典』）役職のことです。譜代大名にとつては、幕府の役職に就く場合、最初に就任する役職であり、若年寄や老中といった要職に就く糸口となる出世の登竜門的な役職でした。そのため、奏者番に就くためには、多少の付け届けが必要であったようです。

康直は、田原藩の財政危機のために、姫路藩十



五万石から持参金付きで来た養子で、兄弟が幕府の役職に就く運動をしていることへの羨望から自身も奏者番に就くことを望んだようです。

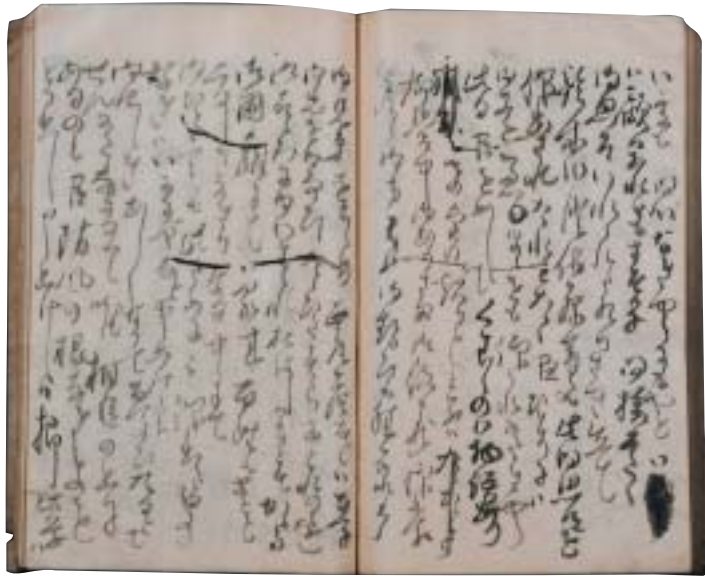
しかし、前述のように、田原に着いての康直の第一声は、「御奏者番御内願之事」と「御妾之事」で、「これ迄私地出て凡十五日二及候得共、御一言民二及候御こと葉なく、唯々御内願と計之事」（十七日の記述）と、藩政をどうしたいかという康直自身の言葉がないことに、華山は心の中で不

満を感じています。

康直が奏者番の件を切り出す時のことを、「昼夜御寐食をも御安じ玉ハず御こゝろにもかゝる御衰弊の御政のうちには、御好がましき事御仰出されんハいかにも御心なきやうにもやとハ御願ハあれども」

と、田原藩の財政が苦しいことを康直自身承知しており、多少の後ろめたさがあるかのよう記してありますが、「御願ハあれども」の前が、黒く消してあります。それも相当黒く塗ったとみえ、この箇所から四丁前、和紙にして七枚分墨が染み込んでいます。当初何と書こうとしていたか興味もたれます。同じページに他に二箇所訂正があることから（この日の書き出しも訂正してあります）、日記とはいえ、康直に対し言葉を選んで書いていたようです。書き進むうちに筆がのってきたとみえ、この日の分の残り四ページに書き損じは、あと一箇所あるだけです。

国家老である鈴木弥太夫、川澄又二郎、佐藤半助には、康直も、奏者番の件は折に触れ口にしてあったのでしょうか。表立って反対されることもなかったようです。しかし、康直にとつて華山は、自分が田原藩に養子に入るのを中心となつて反対した人物であるし、友信の子伯太郎を次期藩主



へする運動を薦めた人物です。家老にしたからとはいえ、反対するかもしれません。そのためもあって、帰着早々意見の聞けなかつた華山を十二日の遠出の供にし、様子を窺ったのかもしれない。康直から話を聞いた華山は、家老の立場から、康直に意見をします。

「かゝる御困難にて御家来百姓もまことにくるしきかぎりなる中にて、御ひと言も此ために被仰出たる事なきはいかにや」

この言葉を聞き、康直は、気分を害したようです。

「御けしきあしくなりて憂ひたるとてせんかたなかるべし。」

しかし、華山は、海岸に生えるボウフウの根のないものをとり出し、意見を続けます。

「仰此草ハ春の陽氣をうけて生立んとせる勢ひあり。これを御手づから御養ひありて末葉迄生出ん様にし玉はらんとなり」

康直は、根のないことを指摘し、
「されバこれハ根なしとても植て育んやうやある。」

と反論します。この反論こそ華山の待つていたものであり、藩政についてボウフウの根に例えて論じます。

「此草に候、固末が末迄も枝葉生ひ出るこそ此草の面目なり。凡侍の国に仕え諸侯の天下につかえるも同じ理にて候。」

そして、康直が「植て育んやうやある」と言った根のないボウフウについて、
「侍の国に仕ふるも諸侯の天下に仕ふるも根なきハ、一身だにたゝぬ理」

と説き、
「侍ハ一家を安くし、諸侯ハ国を安く被游候こそ根といふべけれ」という理由で、

「其根といふ事に御心をとめさ、れ候半にハ御

望もいとやすかるべし」

「先御国家の事にみこゝろを費させられ候半、是かならず御権門賄賂御用游せられ候よりはるかまして、必御登擢あるべきなり」

と結びます。すると、康直は、最前の「御けしきあしく」から「御けしきよくなりて」と変わります。この変化を華山は、康直を「いと御明良にておハしませし」と評価しています。

奏者番の件については、二日後の十七日の項でも再度述べられています。

康直も華山の話に氣をよくしたのか、夜も華山を呼びます。華山は、望遠鏡と寒暖計を献上し、酒果を賜ります。退出後、鈴木喜六の家で風呂に入ります。その時間こえたのか、「蛙声々にすだく。夏のけしきなり。」とあります。

前回の本稿で「此一両夜、藪蚊多シ」という華山の記述について他の虫を藪蚊と勘違いした旨を書きましたが、この記述と合わせて考えると、どうやら天保四年は暖冬、天保の飢饉の前兆が天保三年からあったことから考えると、それ以上に異常気象であったようです。

(続)

研究会員 柴田雅芳



企画展のご案内

五月二十一日(土)～七月十日(日)

春の企画展 漁夫歌人 糟谷磯丸展

(企画展示室一・二、渥美郷土資料館)
伊良湖に生まれ、まじない歌を得意とし、多くの人々に親しまれた漁夫歌人糟谷磯丸の作品世界を展示紹介します。

講演会 六月十一日(土)午後一時三十分から

展示解説

五月二十八日(土)・六月二十五日(土) いずれも午前十一時から

同時開催：渡辺華山と椿椿山の花鳥画

(特別展示室)

華山は椿椿山に花鳥画を学習することをアドバースしています。

七月十六日(土)～九月四日(日)

夏の企画展 彦坂和夫展～過去・現在・未来をつなぐ創造のふるさと

(企画展示室一・二)

彦坂は、昭和10年田原町に生まれ、行動美術協会会友として活躍。昭和55年

からは環境保護活動に取り組み、アートをエコロジーに結びつける「自然との共生」をテーマとします。
同時開催：渡辺華山と齋藤香玉(特別展示室)

香玉は華山に10歳頃から絵を学んだ女性の弟子です。

展示解説 七月二十四日(日)・八月二十一日(日) いずれも午前十一時から

九月十日(土)～十一月六日(日)

秋の企画展 華山没後一七〇年江戸後期の新たな試み 洋風画家谷文晁・渡辺華山が描く風景表現

(特別展示室・企画展示室一)

文晁・華山を中心に、同時期の洋風画家の作品から当時の人々が見た風景、幕末から明治に登場した名所浮世絵を概観し、江戸という時代を現代によみがえらせます。

講演会 十月十一日(火)午後一時三十分から

展示解説

九月二十五日(日)・十月十六日(日)・十月三十日(日) いずれも午前十一時から

同時開催：愛知県美術館サテライト展示(企画展示室二)

平常展のご案内

五月十五日(日)
渡辺華山と金子金陵

華山は17歳で、父の勧めにより金子金陵に絵を学ぶようになります。同じ年には、江戸文人画界の大御所谷文晁にも学びます。

新収蔵品展

寄贈・寄託された美術・歴史資料などを初公開します。

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・赤羽根文化会館展示室でも所蔵品を展示しています。

観覧料

春・夏の企画展

一般四〇〇円

秋の企画展

一般五〇〇円

企画展開催時は小・中学生無料

平常時

一般 二二〇円(二六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

()内は二十人以上の団体料金

休館、毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中
入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。
特典
博物館への無料入館
展覧会・催し物のお知らせ
見学会に参加できます。

博物館日より(年2回)・華山会報をお送りします。

華山会報 第二十六号

平成二十三年四月十一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

常務理事 菰田稀一

事務局長 讚岐俊宣

千四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二二の一

TEL〇五三二―二二一・一七〇〇

FAX〇五三二―二二一・三七七〇

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 山田哲夫

吉川利明 林 和彦

別所興一 加藤克己

林 哲志 中村正子

小川金一 柴田雅芳

中神昌秀 増山禎之

磯部奈三子

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。次回発行予定 平成二十三年十一月一日